モダリティ副詞についてのアンケート調査
――「キット」と「カナラズ」の使い方の差異――

張　　静

1．はじめに

『日本句型辞典』(2002) には「必ず行きません」は誤用であって、「きっと行きません」の方が正しい言い方であるとしている。詳しい説明がない状態で日本語学習者は覚えるしかないと思い、丸暗記している。「きっと」と「必ず」には一体どのような違いがあるか、どのように正しく使い分けられるかを明らかにする必要がある。

『日本国語大辞典（第二版)』(2000)、『大辞林（第三版)』(2006)、『新明解国語辞典（第七版)』(2012) などを調べると、「きっと」と「必ず」の意味は類義語として示されている。二語とも間違いなくそうなると判断する話者の強い確信の気持ちを表すとされている。本研究では、「きっと」と「必ず」はどのような場面で使用されているか、使用実態を調べるとともに二語の使用区分を明らかにしたい。

2．研究の目的と意義

益岡（1991）は、「モダリティとは客観的に把握される事柄ではなく、そうした事柄を心に浮かべ、言葉に表す主体の側に関わる事項の言語化されたものである」と述べている。また、小矢野（1998）は、「モダリティ副詞という単語群は、言語表現において、言語表現行動主体の立場から行われる、出来事に対する評価、判断に対する前置き、出来事と出来事との関係づけ、言語行動における注釈、相手に対するはたらきかけの態度などについての主体的な関わり方を表すという機能を持っている」としている。つまり、モダリティ副詞はモダリティ機能を持つ副詞である。

本研究では、まず、「きっと」と「必ず」を使用する文におけるテンスや動詞の活用形などいわゆる文レベルの共起制約を整理したいと思う。次に、「きっと」と「必ず」というモダリティ副詞が、どのような意識の中で使い分けられているかをアンケートで調査し、結果に基づいてその意味と用法を考察したい。本調査が日本語学習の参考になり、モダリティ研究を進めることができれば幸いである。

3．先行研究

山田孝雄（1908）は副詞を程度副詞、状態副詞、陳述副詞に分類している。工藤（2000）は、陳述副詞（叙法副詞・呼応副詞とも呼ばれる）が、否定・推量・仮定など、述語の陳述的な意味を、補足したり明確化したりするとしている。さらに、陳述副詞は、狭義の「呼応副詞」だけではなく、特定の呼応を持たないものでも一般的にモダリティを表すものも含むと考えられ

る。「きっと」と「必ず」は確信を示す推量的な副詞とされる。仁田（2000）は「推量とは、事態の成立・存在を不確定なものとして、自らの想像・思考や推論の中に捉えたものである」と定義している。つまり、「きっと」と「必ず」を使用する文は話者の心的態度を表すものであると考えてもよいであろう。

工藤（1982）は、「きっと」に３つの意味があると仮定し、①話し手の確信、②確実に実現されることの話し手の期待、③一定条件下での確率、をあげ、その中で③は廃れつつある意味としている。工藤（2000）では、「何か嘘を吐くと、その夜はきっと夜半に目が覚めた」というような一定の条件の下に繰り返して起こるコトガラの確率の高さを表す用例を示している。

小林（1992）は先行研究と誤用調査を基に、文レベルでの形態的な表現形式の共起制約を整理して表にまとめている。「言える」と判断の出ているものは○、「言えない」と判定の出ているものは×とし、（判断に揺れのあるものは△としているが本稿では省略）次の表３－１に抜粋した部分を示す。

表３－１　文レベルの共起制約

	必ず	きっと
～ダ（名詞文）	×	○
～イ（形容詞文）	×	○
～ナイ（否定）	×	○

表３－１を見ると、「必ず」の場合は名詞文と形容詞文と否定文が×である。佐治（1986）は「必ず」は「変わり得る余地のある文末と共起する」とし、否定形（～ナイ）は形容詞と同じく状態性であるためであるとしている。また、小林（1992）は二語の意義特徴について、「きっと」を次のようにまとめている。

① 強い確信や期待を示す。
② 推量の意味を含む。
③ ナル的（無意識的）である。

「必ず」を次のようにまとめている。

① 確率がほぼ100％であるという意味である。
② 繰り返して起こる可能性のあることについて言う（過去一度限りの出来事には言わない）。
③ 変化の意味を持つ動詞に係る（形容詞や名詞のような状態性の文では言わない）。

表３－１の正確さを証明することが本アンケートを実施する目的の一つである。

小池（1999）は「きっと」に関する明治初期から昭和に至るまでの文学作品の調査用例数を整理した。順位は「きっと」の共起成分の用例数で活用形が最も多く、「（ダ）ロウ」が二位になり、「ダ」が三位になり、「ニ違イナイ」が次に来ると分かった。すなわち、「きっと」は推量のモダリティ（ダロウなど）、判断のモダリティ（ニ違イナイなど）、断定のモダリティ（ダなど）としてよく使用されると判断できる。今回のアンケート調査を通してこのデータを検証することができるだけではなく、「キット」と「カナラズ」に関する共起成分の史的変化も多少見られると予測される。

呉（1999）は「必ず」が「事態実現」を「100％の確率」で表しているのに対し、「きっと」は程度は高くとも一つの可能性として「事態実現」を表している。また、山田進（1980）によると「キットは公文書や公式の場面では使いにくい」とされている。

4．研究方法

明治時代以降における文学作品の中で、「きっと」と「必ず」が使用されている例文を取り上げ、検討を行う。二語の使い分けを明らかにするために、回答者に「きっと」と「必ず」の二者択一式の例文を提示して、アンケート調査を実施した。

5．アンケート調査

5－1．アンケート調査の概要

「きっと」と「必ず」に関するアンケート調査（別添資料）を実施し、男女及び出身地のバランスを考慮し、有効回答者のうち100人を対象として結果を集計した。また、出身地は日本に絞って、日本語母語話者のみを対象とした。質問項目21のアンケート調査用紙を作成し、二語の使い分けを調査した。また、アンケート用紙には、意見や感想などが書き込めるよう、自由記述欄を設けた。

5－2．アンケート回答者の内訳

アンケート回答者の内訳は以下の通りである。年齢・性別・出身地のいずれかが無記入のものは無効回答とした。

＜表5－1＞性別内訳

男	女	合計
30	70	100

＜表5－2＞年齢別内訳

10代	20代	合計
54	46	100

＜表5－3＞出身地別内訳

山口	広島	福岡	岡山	島根	長崎	兵庫	佐賀	熊本	鳥取
21	16	13	9	7	6	4	3	3	3
大分	愛媛	香川	宮崎	大阪	京都	静岡	岐阜	愛知	合計
3	3	2	2	1	1	1	1	1	100

性別に関しては女性が男性の2倍以上を占めた。出身地は山口県が最も多く、次いで広島県、福岡県と西日本に集中している。年齢は10代・20代の学生合計100名であった。

6．アンケート集計結果と考察

以下に、設問１から設問21までのアンケートの集計結果を示し、分析する。設問１～４、６、11～12、14、16～20は村上春樹（2009）の『1Q84』（BOOK1）から引用された文である。その他の引用は設問ごとに示す。21の設問文の中で13例を村上春樹の作品から抽出した理由

は、村上春樹の作品が多くの人に読まれており、多くの言語に翻訳されており、現代日本語の表現として問題がないと判断したためである。夏目漱石など発表から百年を経た作品も抽出しているが、それは現代の用法との差異を調べるためである。さらに、文学作品から例文を引用したのは、登場人物の人間関係や文脈的背景からモダリティの要素が分析できると考えたからである。

設問１．そうすれば（きっと/必ず）次につながります。

＜表６－１＞設問１の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	78	22

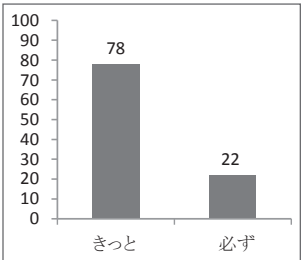

図６－１．設問１の選択率

集計結果は原文と同じ「きっと」を78%が支持している。「そうすれば」という仮定条件があって、設問1は条件文である。「きっと」が選ばれたのは「きっと」には推量のモダリティが含まれているから、話し手の自らの推論を高い確信度を示すことが分かる。工藤（1982）は「きっと」の一定の条件下での確率という使い方が廃れつつあるとしている。しかし、集計結果では「きっと」を78%が支持している。つまり、「きっと」のこの用法はまだ使われていると考えられるだろう。さらに、文末の「つながります」から見ると未来の出来事であるから、「きっと」は話者の希望と願望のモダリティで用いられると考えられる。

設問２．（きっと/必ず）構わないよね。

＜表６－２＞設問２の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	99	1

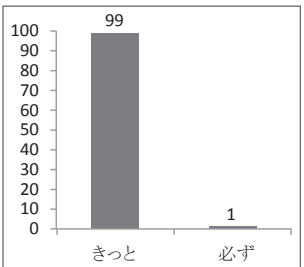

図６－２．設問２の選択率

集計結果は「きっと」を選択する人が圧倒的に多くて原文の「きっと」をそのまま支持する結果となった。文末の共起形式ナイ（否定形）の場合、「きっと」が使用され、「必ず」は使用しないとする小林（1992）を裏付ける結果となった。山田進（1980）によると、命題が「否定」だと「必ず」は使えないとしている。また、文末の終助詞「よ」「ね」から見ると、会話文の中で「必ず」より「きっと」の方が使いやすい傾向があるとも考えられるだろう。それは、終助詞の「よ」も「ね」も自分の判断を示し、相手に同意を求めたり、念を押す機能があるからである。発話者の判断が「構わない」で文末の「よね」がモダリティ表現として、モダリティ副詞「きっと」と呼応している。

設問３．大丈夫、(きっと/必ず) お父さんには聞こえています。

＜表６－３＞設問３の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	91	9

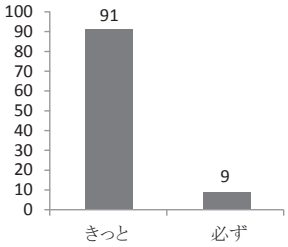

図６－３．設問３の選択率

集計結果は原文の「きっと」を91%が支持している。文末の共起形式テイル（状態・進行）の場合、二語とも使用できるが、「きっと」を使う頻度が高いと言える。また、前後の文脈から、息子の天吾は病院で深い昏睡状態にある父親に語りかけ、看護婦が天吾を励ますモダリティが表現されていると言える。ここでは、「父親」という第三者に対する不確定な推量のモダリティが入っているから「きっと」を選ぶ人が多かったのであろう。

設問４．もし来られないような事情が生じれば、彼女は（きっと/必ず）前もって電話をかけてきた。

＜表６－４＞設問４の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	19	81

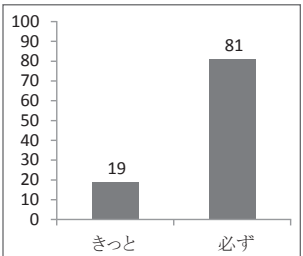

図６－４．設問４の選択率

集計結果は原文の「必ず」を81%が支持している。自由記述欄に「まだ起こっていないことなのに、文末は過去形を使うのがおかしい」と書いている人が5人いるが、寺村（1971）は、～タ形が過去や完了を表すほかにいろいろなムードを表すことを詳しく説明している。設問４の例文はある条件の下では、いつも決まったことが起こることを表す。ここでは、繰り返し実現された確率100%の過去の習慣と読めば「必ず」が使えると考えられる。

設問５．私は客の帰った後で、(きっと/必ず) 忘れずにその人の名を聞きました。

＜表６－５＞設問５の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	11	89

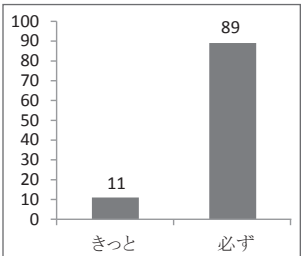

図６－５．設問５の選択率

設問５は夏目漱石（1914）の『こころ』の下「先生と遺書」の第16章から引用された文である。集計結果は原文の「きっと」とは違って「必ず」を89%が支持している。設問5は「私はお客が帰ったら」という条件文として見ることができる。工藤（1982）による「きっと」の一定条件下での確率という使い方は廃れつつあるとしている説に当たり、「きっと」を使わなくなり、「必ず」は設問４のように繰り返される習慣として選ばれたのだろう。あるいは一定

の条件下の確率として「必ず」を選んだのであろう。この設問から時代による用法の変化が窺える。また、設問4と5の結果を見ると、文末が過去形の場合に、「必ず」は一定の条件下の確信の意味でより多く用いられることを示している。

設問６．君なら（きっと/必ず）好きになれる。

＜表６－６＞設問６の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	94	6

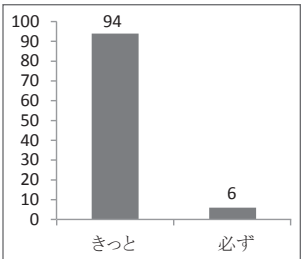

図６－６．設問６の選択率

集計結果は原文の「きっと」を94%が支持している。文脈を示すと、『ニーウマウガ倫理学』という本を相手に勧めている状況下で設問６の例文になる。文末の可能形から推量の気持ちが入っていると考えられる。工藤（1982）は「必ず」の用例の中で「確率がほぼ100%でそのコトが実現することを表す用法が一番多かった」と指摘している。例文に「君なら」という条件があって自分のことではなく相手のことだから、「必ず」では言えないとの判断から、選択率がわずか６%に留まったのであろう。

設問７．あすは（きっと/必ず）いらしってくださいましね。

＜表６－７＞設問７の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	35	65

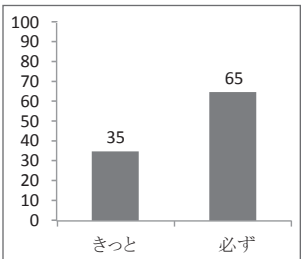

図６－７．設問７の選択率

設問７は有島武郎（1919）の「或る女」から引用された文である。集計結果は原文の「きっと」とは違って、「必ず」を65%が支持している。この文は依頼文である。原文は「きょうのお立て替えをどうぞその中から……あすはきっといらしってくださいましね……お待ち申しますことよ……さようなら」と書かれている。「きっと」を使い、確信や期待を表すと考えられるが、「必ず」が多く選ばれたのは、聞き手に強い依頼を求める場合であると考えられる。

設問８．この次の御手紙では、（きっと/必ず）その問題に触れてお答え下さい。

＜表６－８＞設問８の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	5	95

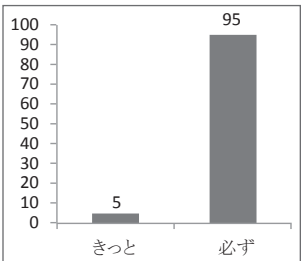

図６－８．設問８の選択率

設問８は太宰治（1942）の「風の便り」から引用された文である。集計結果は原文と同じ「必ず」を95%が支持してい

る。登場人物の木戸一郎と井原退蔵という作家の間の往復書簡という形式で書かれた作品である。原文は「この次の御手紙では、かならず、その問題に触れてお答え下さい。きっと、お願い致します」と書かれており、全文には丁寧な表現が使用されている。「お答えください」は、依頼の表現であり、話者の強い意志の表われとして「必ず」が用いられていると考えられる。

設問９．よろしい、（きっと/必ず）糾明しましょう。

＜表６－９＞設問９の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	14	86

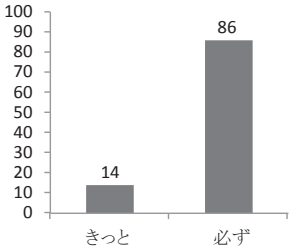

図６－９．設問９の選択率

設問９は獅子文六（1950）の「自由学校」から引用された文である。集計結果は原文の「きっと」とは違って、「必ず」を選択する人が多かった。この設問も「よろしい」というフォーマルな言い方の影響で「必ず」を選んだ回答者が多かったと考えられる。これは、山田進（1980）の「キットは公文書や公式の場面では使いにくい」とする記述を裏づけている。

設問10．秋が去って、冬が来て、その冬が尽きても、（きっと/必ず）会うつもりでいたのです。

＜表６－10＞設問10の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	23	77

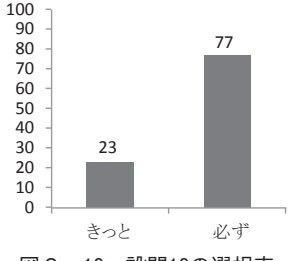

図６－10．設問10の選択率

設問10は夏目漱石（1914）の『こころ』の下「先生と遺書」の第55章から引用された文である。原文の「きっと」とは違って「必ず」を選択する人が77％と多かった。原文は「きっと」を使用し、強い確信を示す。「必ず」が選択された理由はこういうこと自体が起きる確率が高いと思われたからだろう。

「秋が去って、冬が来て、その冬が尽きても」を条件文として見なせば、「きっと」が選ばれないのは工藤（1982）による「きっと」の一定条件下での確率という使い方が廃れつつあるとする説に当たる。

設問11.「ものごとには（きっと/必ず）二つの側面がある」というのが彼の意見です。

＜表６－11＞設問11の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	5	95

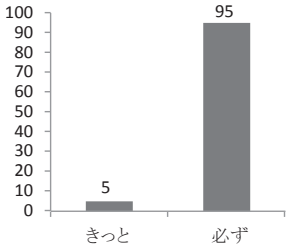

図６－11. 設問11の選択率

集計結果は原文と同じ「必ず」を95%が支持している。この結果から、事実や普遍的な真理を述べる場合には「必ず」を使うと言えるだろう。「きっと」は事実や普遍的な真理を述べる場合には適さないと言えるだろう。

設問12. そういうのは（きっと/必ず）生まれつきのものなのだろう。

＜表６－12＞設問12の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	98	2

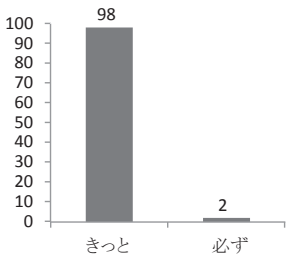

図６－12. 設問12の選択率

集計結果は原文と同じ「きっと」を98%が支持している。小池（1999）が指摘しているように文末の「ダロウ」に影響されて「きっと」を選ぶ人が多かったのだろう。「きっと～だろう」という組み合わせが一般的に認められていると考えられる。「きっと」は「だろう」のような推量の文末表現と共起しやすいことを示している。

設問13. 南アフリカ共和国に対する制裁法案は、（きっと/必ず）可決されるだろう。

＜表６－13＞設問13の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	71	29

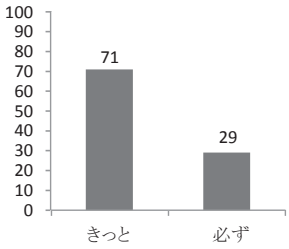

図６－13. 設問13の選択率

設問13は茅野直子ら（1987）の『外国人のための日本語例文・問題シリーズ１「副詞」』から引用された文である。集計結果は原文の「必ず」とは違って「きっと」が71%が支持されている。前項と同様に「きっと～だろう」という組み合わせがあることに影響されて「きっと」を選んだ人が多かったのであろう。

また、呉（1999）は「必ず」が「事態実現」を「100%の確率」で表しているのに対し、「きっと」は程度は高くとも一つの可能性として「事態実現」を表している、という相違点から、「きっと」と「必ず」の使用には差が表れると述べている。設問13では、話者の気持ちによって制裁法案を可決して欲しいという気持ちが強い人は「必ず」を使用する傾向があるとも考えられる。

設問14.（きっと/必ず）会見の結果を聞きたがっているに違いない。

＜表６－14＞設問14の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	97	3

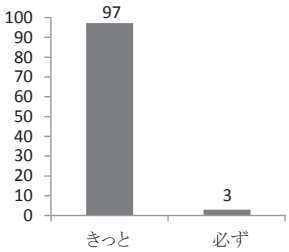

図６－14. 設問14の選択率

「きっと」を選択する人は圧倒的に多くて原文の使い方と一致した。文末の「に違いない」の「ない」は否定として考えられ、小林（1992）の文レベルの共起制約の否定の場合、「きっと」は使えるが「必ず」は使えないことが支持された。設問14では、推測の意味を表すために「きっと」が選ばれたと考えられる。設問14以外に「きっと～にちがいない」のような組み合わせもよく使われている。この点は小池（1999）の「きっと」に関する共起成分の用例数の調査結果を裏付けている。

設問15. 先生は月に一度ずつは（きっと/必ず）この木の下を通るのであった。

＜表６－15＞設問15の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	3	97

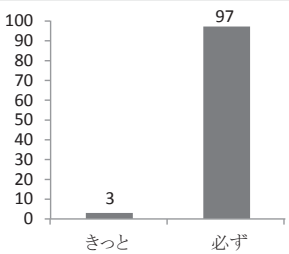

図６－15. 設問15の選択率

設問15は夏目漱石（1914）の『こころ』の上「先生と私」の第5章から引用された文である。集計結果は原文と同じ「必ず」を97%が支持している。小林（1992）の「必ず」の意義特徴に関する②「繰り返して起こる可能性のあること」に該当すると言える。

設問16. 学校の給食の前にも（きっと/必ず）お祈りをしなくてはならない。

＜表６－16＞設問16の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	3	97

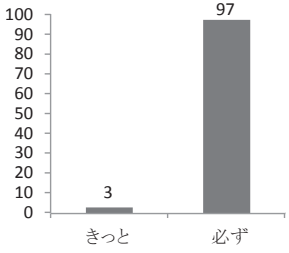

図６－16. 設問16の選択率

集計結果は原文と同じ「必ず」を97%が支持している。この設問文は既定の習慣を伝達する場面で生じた例文である。つまり、規則を表現する場面に「必ず」の方がよく用いられると考えられる。

設問17. 小松は（きっと/必ず）天吾のところに連絡してくるはずだ。

＜表６－17＞設問17の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	69	31

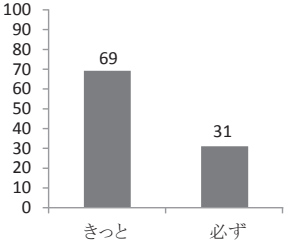

図６－17. 設問17の選択率

集計結果は原文の「必ず」を使用するのに対して「きっと」を選ぶ人が69％と多かった。例文の「はずだ」は確信が高い推量のモダリティを表す言葉であって、「きっと」と共起しやすいため、多く選ばれたのだろう。小林（1992）の「必ず」①「確率がほぼ100％である」という客観的な意味で「必ず」が選ばれた理由であろう。

設問18. （きっと/必ず）仲の良い友達もできていたはずだ。

＜表６－18＞設問18の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	99	1

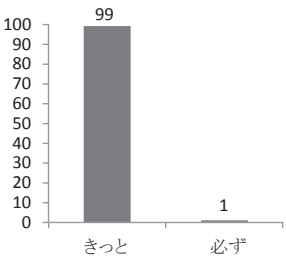

図６－18. 設問18の選択率

集計結果は「きっと」を選択した人が99％で原文の「きっと」をそのまま支持する結果となった。「はずだ」と言う文末表現から判断すると、小林（1992）が「きっと」の意義特徴として示している①の例として解釈できる推量の文である。したがって、「きっと」を選択した回答者が多かったのであろう。

設問19. マガジンを抜くときには、（きっと/必ず）安全装置をかけておくこと。

＜表６－19＞設問19の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	2	98

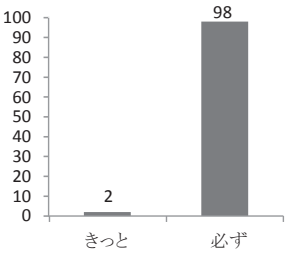

図６－19. 設問19の選択率

集計結果は原文と同じ「必ず」を98％が支持している。手順を説明する場合に、「必ず」を使用する典型例と言えるだろう。また、「必ず」は設問16と同様に規則を伝達する場合にもよく用いられることが分かる。

設問20. ぶちのめしても、ぶちのめされても、俺は（きっと/必ず）彫刻刀を取り戻してやった。

＜表６－20＞設問20の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	23	77

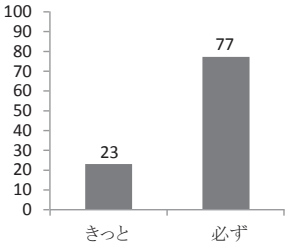

図６－20. 設問20の選択率

集計結果は原文と同じ「必ず」を77%が支持している。「必ず」は強い意志・決意を表すモダリティー副詞である。「きっと」を選ばないのは前件「ぶちのめしても、ぶちのめされても」を条件と解釈して、工藤（1982）の「きっと」に関する③「廃れつつある意味」と解釈できるからであろう。

設問21. ご招待ありがとうございます。（きっと/必ず）伺います。

＜表６－21＞設問21の集計

選択項目	きっと	必ず
選択数（%）	5	95

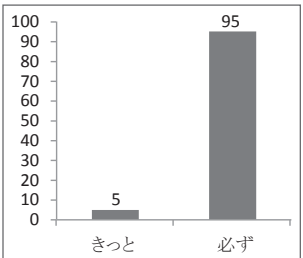

図６－21. 設問21の選択率

設問21は于春池（2002）の『日本句型辞書』から引用された文である。集計結果は原文と同じ「必ず」を95%が支持している。山田（1980）では「キットは公文書や公式の場面では使いにくい」と指摘している。従って、正式な場面で敬語を使ったりする時に、「必ず」のほうが使いやすい例と言える。

７．まとめ

アンケートの集計結果から「必ず」と「きっと」の分析のまとめを以下に示す。原文と同様に「きっと」が多く選択された設問文は＜表７－１＞に示し、原文と同様に「必ず」が多く選択された設問文は＜表７－２＞に示し、集計結果が原文の使い方と異なっている設問文は＜表７－３＞に示す。（表７－１～３の太字と下線は筆者）

＜表７－１＞原文の「きっと」が支持されている設問文（80%以上の選択率）

設問番号	設問文	選択率（%）
2	**きっと**構わないよね。	99
18	**きっと**仲の良い友達もできていたはずだ。	99
12	そういうのは**きっと**生まれつきのものなのだろう。	98
14	**きっと**会見の結果を聞きたがっているに違いない。	97
6	君なら**きっと**好きになれる。	94
3	大丈夫、**きっと**お父さんには聞こえています。	91

＜表７－１＞によって設問２、18、14を典型例として分析する。設問２、18、14が小林（1992）文レベル共起制約の表を裏付けている。それ以外の設問文は小池（1999）の「きっと」に関する共起成分の用例調査の結果に当てはまることが分かる。つまり、「きっと」は推量のモダリティ（ダロウなど）、判断のモダリティ（ニ違イナイなど）、断定のモダリティ（ダなど）としてよく使用されると断明できた。要するに、「きっと」は主観的根拠にもとづいて命題が成立する言葉である。

＜表７－１＞の「きっと」の使い方を以下にまとめる。

① 推量の意味が含まれ、コトに対する話し手の自らの推論を高い確信度や期待を示す。(2.18)
② 希望や願望を表したい場合は「きっと」を用いる。(6)
③ 文末の共起形式ナイ（否定形）の場合に使用できる。(14)
④ パーソナルな場合によく使われる。(6.3.2.18)
⑤ 曖昧な不確定な事柄また変わり得る余地がある場合に使いやすい。(12)

＜表７－２＞原文の「必ず」が支持されている設問文（80％以上の選択率）

設問番号	設問文	選択率（%）
19	マガジンを抜くときには、**必ず**安全装置をかけておくこと。	98
15	先生は月に一度ずつは**必ず**この木の下を通るのであった。	97
16	学校の給食の前にも**必ず**お祈りをしなくてはならない。	97
8	この次の御手紙では、**必ず**その問題に触れてお答え下さい。	95
11	「ものごとには**必ず**二つの側面がある」というのが彼の意見です。	95
21	ご招待ありがとうございます。**必ず**伺います。	95
4	もし来られないような事情が生じれば、彼女は**必ず**前もって電話をかけてきた。	81

＜表７－２＞によって選択率が90％以上の六つの設問文を分析する。設問19では「マガジンを抜くときには、安全装置をかけておかないといけない」という手順を表すために「必ず」を使用すると考えられる。設問11の事実命題の中の「必ず」は話し手の気持ちを強調する効果があると考えられるだろう。設問15と４は繰り返された習慣として用いられている。設問８と21はフォーマルな場面で文中の敬意表現に影響されて「必ず」が95％選ばれた理由であろう。

＜表７－４＞の「必ず」の使い方を以下にまとめる。

① 共起形式ナイ（否定形）の場合に使用しないが、手順･規則を伝達する場合は例外。(19.16)
② 繰り返して実現される確率が高い過去の習慣を表す。(15.4)
③ パブリックな側面を持ち、「必ず」を使用して信頼性を示す。(19.16.21)
④ 話し言葉に多い「きっと」とは対照的に「必ず」は書き言葉として使いやすい。(8.21)
⑤ 聞き手に強い気持ちの依頼・命令を伝える。(19.16.8)
⑥ 普遍的な事実命題を述べる。(11)

＜表７－３＞原文が支持されなかった設問文

設問番号	設問文	選択率（%）
5	私は客の帰った後で、（きっと）忘れずにその人の名を聞きました。	11
7	あすは（きっと）いらしってくださいましね。	35
9	よろしい、（きっと）糾明しましょう。	14
10	秋が去って、冬が来て、その冬が尽きても、（きっと）会うつもりでいたのです。	23
13	南アフリカ共和国に対する制裁法案は、（必ず）可決されるだろう。	29
17	小松は（必ず）天吾のところに連絡してくるはずだ。	31

＜表７－３＞では、太字と下線で示されている語が原文で使用される語である。工藤（1982）は「きっと」を三つの意味に分類し、その中で③一定条件下での確率を表す用法は廃れつつある意味としている。設問５、10はこの③の意味にあたり、「きっと」を使わずに「必ず」を支持している人が多かった。つまり、一定条件下での確立を示す用法は使われなくなる変化が窺えた。設問７、９は原文フォーマルな場面の影響で「必ず」が選ばれたのだろう。設問13、17は原文文末の「ダロウ」と「はずだ」に影響されて、回答者が推量の意味と判断したのは「きっと」が選ばれた理由になったのであろう。設問文５、７、９、10の出典は夏目漱石、有島武郎、獅子丈六と古いのでこれらの設問文から「きっと」と「かならず」に関する使い方の変遷も見られる。更に、設問７、９、10から考えると、古い時代に未来についての事は「きっと」を使いやすい傾向があったと考えられる。

本研究において、「きっと」と「必ず」に関する先行研究を生かして、モダリティ表現に着目して調査を行った。アンケートの集計結果を分析するうちに、小林（1992）の論文の表３－１の三項目が裏付けられた。表７－１は会話文で、「きっと」は話し言葉として使いやすい傾向があると言える。事実を述べる場合や繰り返す動作を表現する場合に、「必ず」を多く使用することも分かった。

８．今後の課題

本研究は「きっと」と「必ず」における使い分けをモダリティの視点から論じた。今回のアンケート調査は学生を対象として行ったが、より客観的なデータを収集するため、今後幅広い年代にわたって調査し、考察しようと思う。実際、設問７や設問20のように、前後の文脈がないと理解しにくい例文であるから、回答者を悩ませることになってしまった。今後例文の取り上げる方を更に考慮する必要がある。また、例文は主に単文レベルで行った。しかし、「きっと」と「必ず」が「働きかけ」のような「聞き手指向」のモダリティ形式と共起する場合、上下、親疎のような話し手と聞き手との関係が共起関係にも影響を与えることが予想される。例えば、設問７のような原文の表記は全部ひらがなで書かれており、女性の発言でもあり、少し柔らかめの「きっと」が使いやすいだろうと推測される。今後は、回答の男女差に着目して、分析していきたい。

「きっと」と「必ず」のような推量的な副詞の叙法形式の史的変遷についてもより深く考察

したいと考える。

さらに、設問13の出典は「外国人日本語学習者に向ける問題シリーズ」であるが、取り上げられた「必ず」を用いた例文はアンケートの集計結果と異なる。このような学習材料の作成は、実際の母語話者を対象とするアンケート調査を実施し、それを基に適切な例文を用いる必要があると考える。

【例文出典】

有島武郎（1913）『或る女』岩波書店／茅野直子・秋元美晴・真田一司（1987）『外国人のための日本語　例文・問題シリーズ１「副詞」』荒竹出版／獅子文六（1952）「自由学校」『獅子文六作品集＜第1巻＞』文藝春秋新社／太宰治（1988）「風の便り」『太宰治全集4』ちくま文庫、筑摩書房／夏目漱石（1914）『こころ』岩波書店／村上春樹（2009）『1Q84（BOOK1）』株式会社新潮社／于春池（2002）『日本句型辞書』外語教学与研究出版社

（注）夏目漱石の『こころ』は1914年4月より朝日新聞に連載され8月に完結し、同年10月に岩波書店店より出版された。本稿では1952年発行され1984年改訂された新潮文庫版を用いた。

【参考文献】

工藤浩（1982）「叙法副詞の意味と機能―その記述方法をもとめて―」『 研究報告集3』国立国語研究所

工藤浩・仁田義雄・森山卓郎（2000）『日本語の文法＜3＞モダリティ』岩波書店

小池康（1999）「小説の用例に見るモダリティ副詞と共起成分の変遷」『筑波応用言語学研究』第6号、筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース　pp.55-68

小林典子（1992）「『必ず・確かに・確か・きっと・ぜひ』の意味分析」『日本語教育論集』筑波大学留学生センター

小矢野哲夫（1998）「モダリティ副詞の文章上の機能」『ことばから人間を』昭和堂

呉珠熙（1999）「『きっと』『必ず』の意味・用法」『筑波応用言語学研究』第6号　筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コースpp.41-54

佐治圭三（1986）「『必ず』の共起の条件―『きっと』『絶対に』『どうしても』との対比においてー」『同志社女子大学学術研究年報』第37巻Ⅳ

寺村秀夫（1971）「'タ'の意味と機能－-アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ」『言語学と日本語』くろしお出版社

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティの人称』ひつじ書房

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版社

山田進（1980）「キット」「カナラズ」『ことばの意味3－辞書に書いていないこと』平凡社

山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館

（チョウ・セイ）

【別添資料】

「キット」と「カナラズ」に関するアンケート調査

以下の設問文を読み、あなたがより使いやすい方に〇をおつけ下さい。

1．そうすれば（きっと/必ず）次につながります。
2．（きっと/必ず）構わないよね。
3．大丈夫、（きっと/必ず）お父さんには聞こえています。
4．もし来られないような事情が生じれば、彼女は（きっと/必ず）前もって電話をかけてきた。
5．私は客の帰った後で、（きっと/必ず）忘れずにその人の名を聞きました。
6．君なら（きっと/必ず）好きになれる。
7．あすは（きっと/必ず）いらしってくださいましね。
8．この次の御手紙では、（きっと/必ず）その問題に触れてお答え下さい。
9．よろしい、（きっと/必ず）糾明しましょう。
10. 秋が去って、冬が来て、その冬が尽きても、（きっと/必ず）会うつもりでいたのです。
11.「ものごとには（きっと/必ず）二つの側面がある」というのが彼の意見です。
12. そういうのは（きっと/必ず）生まれつきのものなのだろう。
13. 南アフリカ共和国に対する制裁法案は、（きっと/必ず）可決されるだろう.
14. （きっと/必ず）会見の結果を聞きたがっているに違いない。
15. 先生は月に一度ずつは（きっと/必ず）この木の下を通るのであった。
16. 学校の給食の前にも（きっと/必ず）お祈りをしなくてはならない。
17. 小松は（きっと/必ず）天吾のところに連絡してくるはずだ。
18. （きっと/必ず）仲の良い友達もできていたはずだ。
19. マガジンを抜くときには、（きっと/必ず）安全装置をかけておくこと。
20. ぶちのめしても、ぶちのめされても、俺は（きっと/必ず）彫刻刀を取り戻してやった。
21. ご招待ありがとうございます。（きっと/必ず）伺います。

上記のアンケートについては、お気づきの点やご意見などがありましたらお書き下さい。

国籍（　　）　出身地（　　）都道府県　　性別（男・女）
年齢（１０代・２０代・３０代・４０代・５０代・６０代・７０代以上）
職業（学生・社会人）

ご協力ありがとうございました。